お茶の水を去るに当たって

坂元彦太郎

〈1〉

この三月末をもって、わたしはお茶の水女子大学教授としての定年に達して、併任していた附属幼稚園をも当然やめることになった。この稿を書いているのは、まだ二月のことであるが、五月号にのるからには、既定の事実として述べるより外はあるまい。このことは、日本幼稚園協会の、名目上の会長であることをもやめ、本「幼児の教育」とも直接的な関係をもたなくなることになる。これから書くような、私事や私情に関するような原稿が、現在の本誌の傾向にそぐわないことを知りながら、最後であることの特権（？）を利用して、ちぐはぐな感想を語ることにしたい。

十年前、昭和三十四年の四月に、私の書いた文章の一部に次のようなものがある。

「こんど、昨年からお茶の水女子大学にきていたわたしに、及川ふみ先生が停年で退かれたあとが、まったく思いもかけずに、回ってくるのである。日本でいちばんゆいしょのある園に勤めるなど、まったく夢想もしなかったことである。

〝上がり理論〟というのを、最近、東大のある法学部の教授から聞いたことがある。まだそういうことが実現していないうちに、ある人が、上がり（すごろくでいう）になったらどういう位地につくか、ということを考えるのだそうである。たとえば、そのひとたちは、田中耕太郎先生の上がりは、最高裁判所

長官であり、蠟山政道先生の上がりは、お茶の水女子大学長である、という説を前から立てていたそうである。むろん、立身出世といった立場からではなく、そのひとにうってつけのポストという意味合いが非常に強いのだそうだ。

こういうふうに考えれば、わたしの上がりは、結局、どこかの幼稚園長であろうか。そこに落込むことが、なんとなくぴったりするという人が多いような気がする。

あちこち、さいころをころがして、結局上がったのが、こんどのわたしの仕事と思えないことはない。……運命のいたずらか、考えてみれば恐ろしいような園に行くことになったものである。しかし、わたしは今まで、どんなさいころの目が出ても、それに身を任せてやって来た。どんなことになるか知らないが、ただ、その瞬間瞬間、自分のできるだけのことを、今までどおりやろうと思っているだけである。」

この上がり理論をわたしに教えてくれた当時の東大教授は、実は、田中二郎氏で、その上がりは最高裁判所長官と予想される人その人であることも書き添えておこう。

及川先生の前が、長い間勤められた倉橋惣三先生である。大正六年から、断続して昭和二十六年まで、付属幼稚園主事として在任されたことはいうまでもない。多くの人は、ずっと切れ目なしに在任されたように、思っている人が多いが、途中で二回、あわせて八年ほどは、幼稚園主事の任を離れておられたのである。にもかかわらず、倉橋先生の幼稚園ということになってしまっているのである。

実は、いつの頃か、お茶の水の幼稚園には、主事である教授や、保母の職にある人以外に、いわば理論的な研究をする人が参加することになっていた。多分、中村五六先生の主事のころではないかと思うが、想像するに、幼稚園の運営や研究がふじゅうぶんだから、強化しなければならないとしてのことであろうが、一方、保育実習科（名前はいろいろに変わった）で関係のことを講義するためでもあった。

東基吉先生と、和田実先生との二人は、はっきりとわかっているが、東基吉先生はその追想の中で自分は「幼稚園批評係」という辞令をもらったと書いておられる。東先生は、教授の身分、和田先生は助教授の身分であった。そして、この二人が、倉橋先生より前に、あるいは、ならんで、幼児教育について革新的意見を出して、そうした運動のさきがけとなられたことは、注目すべきことである。東先生が地方の師範学校長に「栄転」されたあとに、和田実先生がはいられたと思われるが、「幼児の教育」の前身である「婦人と子供」の編集も、引きつがれた

ように思える。そのころから、倉橋先生も女高師講師となって姿を現わすようになり、和田先生とならんで寄稿をしていた。

大正六年になって、倉橋氏が幼稚園主事になられた頃には、和田先生は女高師訓導（なぜか身分が変わっている）から、身をひいて野に下られて、自分で幼稚園を経営されるようになっていた。そこに、何か事情があったか、どうか、私には、はっきりしない。

倉橋先生が主事になってからは、このような、理論家のポストを別に設けるようなことは、ずっと、なくなったようである。むしろ、必要がなくなったのかも知れない。というのは、同氏は、理論と実際とを常にかねあわせて処理できる、わが国では珍しい存在であったからだ、と考えることができるであろう。

大正六年、同氏が主事になったときに、形式的な全園会集をやめ、恩物をかごに入れて普通の積木にした、というエピソードが伝えられているが、すでに幼児教育について一家言をもっていた同氏が、その主張を実践に移そうとつとめたことは、疑いのないところである。しかしながら、同園の実際が、同氏の説くところ、考えるところとが、すき間もなく、ぴったりしていたか、どうかはかんたんに定めることはできず、両者の関係には微妙なものがあったにちがいない。

少し横道にそれるが、倉橋先生が、関東大震災のあとしばらくして、大正十三年末に高等女学校主事になったのは、普通の栄転コースにのったものであるが、数年にして高女主事をやめたのは、当時の茨木校長排斥の内輪もめによるものである。そして、二年ほど非番であったが、当時の斎藤高女主事が急死したので、小学校の主事が高女へ、幼稚園の堀[illegible]事が小学校へと「栄進」し、三度倉橋先生が幼稚園主事になったのが昭和六年のことである。学外で、一部からは神格視されるくらいであった同氏も、学内では必ずしもそうはいかなかったようである。

ところで、幼稚園教育の実際と、同氏の考えるところとの関係についてであるが、園には長い伝統があって、その中で移り変わり、育ってきたものが、一朝一夕に変えられるものではなく、おそらくさまざまな場合があったであろう。あるときには、お互いに矛盾とまではいかないが、ある程度ちがったままで平行することもあったであろう。どちらかといえば、すでに学外で、文筆や講演により、ことに関西の地方で同氏が主張しつづけたことが、間接に同園の先生方の耳にも入り、それにもとづいて園のあり方を変えていくといったこともあったようだし、逆に、園のやっていることにヒントを受けて、学外で講演す

るということもあったであろう。わたしの経験から考えても、園内の先生と、当面のことなどはじゅうぶん話し合ったであろうが、園内では、理論的にことこまかに説きつくすというようなことは少なかったと考えられる。いわば、先生たちは実際を、倉橋先生は理論をというような分業をしながら、長年のうちに、しだいに相互に浸透しあった、というのが真相に近いかも知れない。

こうした長年の経過の中にできあがったお茶の水の幼稚園の伝統的な空気は、まことにどっしりとしたものであった。倉橋先生にしても、決してへりくつをこねないで、円転滑脱であるし、保母の方々も理論的なことにこだわらないで、現実的な態度の人々であったので、園の教育は、ぎすぎすした革新性がとぎすまされるのとは正反対に、おっとりとしてあたたかい、しかしのびのびとした空気がみなぎっていた。外部から見れば、理くつをいうことを極度に避けて、理論的な研究を軽視するにも近いような空気にさえ見えた。

しかしながら、その内部にはいり、十年もいっしょに生活してみると、このようなお茶の水の空気のよさもよく分るようになったが、そこにまた、新しく転回があってもいい、と思われることもないでもない。いずれにしても、過去九十年のうち、わたしが受けもった歴史の切れっぱしの十年について、記録をとどめておくことが、私の責務ではないかと思う。

〈2〉

ひとつには、「幼児の教育」の性格の変貌にもよる。明治三十四年、「婦人と子供」という名で、フレーベル会によって創刊されたが、大正八年倉橋氏が、フレーベル会を「日本幼稚園協会」と改称し、同時に、雑誌をも「幼児教育」と改めた。（のち、発行所の変更のときに「幼児の教育」となる）それ以後震災や経営上の理由などでの一時的な休刊をのぞいてずっと月刊されたが、戦前は、幼稚園教育における唯一の雑誌であり、関係者にひろく読まれ、さまざまな記録や予報も欠かさずにのせられていた。

ところが、戦後復活してからは、数種におよぶ同類のものが出るようになり、編集のしかたも現在のような特色をもつようになったために、戦前、幼児教育のことを研究する最大の手がかりに「幼児の教育」がになっていたような役割を、現在は果たしてはいない。したがって、この十年間にわたしたちがやってきたことを最小限度にでも、書き残して置く責務を感じてい

るのである。

先ず、日本幼稚園協会の歴史をかんたんに述べよう。明治二十五、六年ごろから、東京にはお茶の水の幼稚園の先生を中心とする保母会と、都下の先生方でできている会とがあって、それぞれ保育のことを研究していたが、両者が合同して、一つのしっかりした団体をつくる気運が盛りあがって、フレーベル会を結成し、明治二十九年四月二十一日に発会式をあげた。この日が、フレーベルの誕生日であるのはもちろんであるが、これがわが国でのこの種の団体の最初であったろう。なお、四月二十一日は、また倉橋惣三氏が昭和三十年に没したその日であることも奇縁というべきであろうか。

フレーベル会は、はじめかんたんな会報を出していたが、明治三十四年から「婦人と子供」を刊行するようになった。直接に編集に当たったのは、東基吉、和田実、倉橋惣三とつづいたが、倉橋氏が大正六年幼稚園主事になるに及んで、会名を、日本幼稚園協会に、雑誌名を「幼児教育」に改めた。フレーベルを受けて、それを越え、わが国独自の幼児教育をうちたてようとする彼の意気ごみが、このことにも現われていた、といっていいであろう。日本幼稚園協会になってからは、会員を地方からも集め、各府県単位の保育会の加入をもすすめたが、相当数の加入があったようである。

日本幼稚園協会は、幼児保育の研究を振興するために、「幼児教育」の刊行の外に、いろいろな事業をしたが、注目すべきは、夏季の講習会の開催であった。大正五年八月、わが国ではじめての、文部省主催の幼稚園に関する講習会が、東京女高師で開催されたが、大正七年からその午後を利用して、日本幼稚園協会によって遊戯の講習会がおこなわれた。それから毎年同様なことがおこなわれたが、昭和八年はじめて午前中の講習会をも日本幼稚園協会が主催することとなった。とき、倉橋氏が再任された間もなくであり、新装の講堂で（現在のお茶の水女子大学の講堂）同氏の熱のこもった講演がおこなわれた。この講演をもとにして名著「幼稚園真諦」が生まれたのである。もっとも文部省の講習のときから、必ず倉橋氏は出講していて、この会の記録や速記は「幼児の教育」誌上をにぎわしていた。また戸倉先生のダンスの講習も、大正十四年以来であることも書き添えておこう。戦争がはげしくなって、この講習会も休止されたが、戦後、昭和二十三年には、日本幼稚園協会主催で、午前は、講演を主とし、午後は戸倉先生の遊戯を主にして講習会が復活し、現在につづいているのであるが、昨夏、戸倉先生の逝去によって、新しい転回がどうしても必要となった。この講習会

も、従前はほとんど類例のものがなく、わが国幼児教育学のメインイヴェントであったが、現在は、これまた類似のものが多くおこなわれるようになった。

このようにして、日本幼稚園協会は、いまは、お茶の水幼稚園の関係者を中心にした、ささやかなものになったが、夏の講習会と「幼児の教育」の発行との二つに、むかしながらの歴史的使命を果たしているだけとなっている。しかしながら大正五年以来の講習会で、その講演に選ばれた題目を私が調べてみたが、そのときどきの関心の焦点がしのばれて興味ふかいものがある。現在、同類のものがふえて、稀少的な価値はなくなったが、会それ自身は戦後いっそう盛となって今日に至っている。

なお、戦後、おこなわれるようになった、附属幼稚園が「幼児教育研究会」という団体名をもって開く、教育実践研究会もすでに第十七回になっている。はじめは附属小学校といっしょにおこなっていたが、別々に開くようになり、これまた年々盛になってついに堂にあふれる来観者を収容することができなくなった。そのこともあって、昨年以来、こうした研究発表会のやり方としては画期的な変更を加え、参加人数を制限し、一日の保育をありのままに観てもらうようなやり方に変えた。

もともと、お茶の水の幼稚園は、派手なことがきらいで、容易に外部の人たちに参観するのを認めなかった。それは、幼児の遊びのじゃまになるという心配もあったようだが、研究会のとき以外でも、差支えのないときには、金曜日には外部の人たちに参観してもらう、というようになってきた。少なくとも、私はいくつかの理由で、できるだけ多くの人たちに、お茶の水の幼稚園の実際のありさまを観ていただきたい、と切に希望しているのである。

〈3〉

お茶の水の幼稚園のとりえは、日々の素ぼくな、子どもたちと先生との間の、すなおな交流にある、と思うのである。施設や設備も、特にぜいをこらしたり、新奇なものはない。その方面で、何かとりえがあるとすれば、森や木や雑草の多い園庭の広さと、各室に積み重なっているさまざまながらくたにちかい遊び道具と、だけである。特別に、歌や、絵や、おどりが上手なわけではない。いわゆる教育課程や指導計画に特別な趣向をこらしたりすることは、さらにない。

幼児たちが特別にえりすぐってある、という人々があるが、それは誤解である。たしかに、明治のはじめは、貴族の子ども

たちばかりであったろうが、明治のおわりごろから志願者がふえたために、抽せんを加味して入学者をきめるようになってから、ことに、近ごろのように数十倍の志願者を、先ず抽選でふるいおとして十分の一にしてから選考するようになって、素質的にも、家庭的にも、東京のごく普通の家庭の普通の子どもになっているのである。それに、お茶の水女子大学全体としての特質ともいっていい、エリートぎらいの空気もあって、全く普通の子どもたちの集まりである。

しかし、庭のひろさ、大いちょう、森や山や草や花や、さらに虫やとかげまでいるということが、最大の利点の一つであり、あるいはこの点は日本一かも知れない。また、各部屋には、実にさまざまな、しかし決して高価ではない。手製のものをも含んだ、おもちゃや遊び道具がいっぱいあって、雑然としながら奇妙に整頓されていることが、第二の特長としてあげることができるであろう。

これらを背景として、子どもたちと先生との、純すいな結びつきと、それにもとづいた子どもたちののびのびとした生活がある。ある人は自由放任過ぎるといい、また、他の面を見た人はあまりにもかんたんに保育を考え過ぎているといっている。思うに、あるきまった様式ですべての場合を律しようとせず、そのとき、その子どもによって、自在な対し方をとることに徹している。ある場合は、ある子どもを、ひとりで同じ遊びを数日間もつづけさせて平然としているか、とみれば、子どもが何かをつくろうとするときすぐそれを受取って先生が自分でしてやって平気でいる。徹底的に子どもたちと庭で追いかけっこをして汗をながしているかと思うと、時刻がくるとみんなをちゃんとならばせて、はとぽっぽ体操を一斉にやる。そのとき、その子どもにそのやり方がいいと思えば、なりもふりもかまわず、平然としてどんなことでもできるのである。たとえば、数日間、同じひとりあそびをさせて平気なのは、その子がちょうどそういう時期で、そこをじゅうぶんに経験しつくしてから次の段階にのぼることが見えているからであり、すぐ加勢をするのは、まだその幼児がひとりで苦労しても何もできないのを見越し、しかも教師が加勢することが、かえってときがくればその子の自発を促すことになるような機微をさとってのことである。ばらばらに遊ばさねばいけないとか、一斉に体操させてはいけない、とか、そうした一つの型にこだわろうとはしないのである。——といって、また、すべての先生が同じようにこうした自在な処置ができるほど達識である、というわけでもない。

ただ、いえることは、ひとりひとりの先生が何よりも先ずひ

とりひとりの子どもと、じかに結びつき、そこに信頼と愛情のきづなをつくりあげることが、何よりも先ずたいせつである、という平凡なことを知っていて、それを身をもって実行しようとするからである。そして、ひとりひとりの子どもに、ま正面から向かうことを常に心がけているからである。したがって、あるときはとことんまで子どもたちと遊びほうけるかと思えば、あることについては、どこまでもがまんして徹底的にしつけようとする。

このような伝統ができている園につとめることになったわたしは、ただ、その流れをそのままに流せばいいと考えた。そしてその流れの中で、わたしの身につけることのできるだけのことをくみとろうとした。先生たちや子どもたちが、あとからのちん入者に過ぎない園長に対して、警戒心や抵抗をもたせないためにはいろいろなくふうを要した。むろん、時間が長くたつことが第一の妙薬であるが、ちょうど、鳥やけものの生態を観察するときに、木の葉などでつくったかこいにかくれて近づくみたいに、わたしはカメラのうしろにかくれることにした。二、三年たって、カメラをもって庭や部屋にたてば、子どもたちも、したがって先生たちもほとんどわたしを意識しなくなった。むろん、写真をうつすこと自身にも意味のあることであったが、このようにして、子どもたちの生活に近づき、ありのままの先生の姿をしげしげと見ることができた。そして、写真の仕事は、九十周年記念に刊行した写真集、「絵で見る教育課程」にも結晶したが、実は、こうした印刷になる前に、私の頭や胸の中にお茶の水幼稚園がありのままに結実したのであった。

幼児と直接に遊んだり、取っ組んだりすることも、何のこだわりもなしにできたが、正直にいって、長い時間彼らの相手をすることができるようには、到頭なれなかった。かの、倉橋先生でさえ、子どもたちの手から逃れようとして追っかけられながら職員室に逃げて先生方に助けをもとめられた、という笑い話が残っているが、わたしなぞには、しばしばそういうことがおこった。その度に、わたしは、思った。それぞれの先生と、子どもたちの間には、とてもわたしたちのはいりこめない、きずなの秘密があるのだ。わかったふりをして、いろいろなことを外からいうことは空虚なことだ、と。あたかも、母親とその幼なごとの間の結びつきのようなものが、幼稚園の中にはあたたかくみちているのだ、ということをようやく知って、そして、定年を迎えることになったのである。この、さとりを、そして思い出をだいじにして、これからも元気でいよう、と新しいサイコロの運命に従おうとしているところである。